

心理リハビリテーションキャンプにおける“流れ” —食事時の手拍子からその一端を捉える試み—

“Change in mood” of Psychological-Rehabilitation Camp -Trial to catch a taste of the change from handclap of the meal-

牛 山 卓 也*
Takuya USHIYAMA

はじめに

心理リハビリテーションキャンプとは

心理リハビリテーションキャンプ（以下、キャンプと記す）とは、動作を通じてその人自身に働きかける心理臨床的アプローチである臨床動作法（武内，2010）のうち、対象者の動作不自由の改善に主に重きを置く動作訓練を、宿泊して、集団集中的に行う場であり機会である。そして、動作訓練においては、その開発当初からこの宿泊集団集中訓練の形式を実施の1つの形態としてきた（糸永，2008）。

キャンプの目標と構造

キャンプは、トレーニー（動作を獲得しようとする者、以下Teeと記す）、トレーナー（動作の訓練を支援する者、以下Terと記す）、スーパーバイザー（訓練やキャンプ運営の指導者、以下、SVと記す）、保護者のメンバーから構成される（丸山，2011a）。プログラムの例を表1に示す。

キャンプにおける主たる目標は、動作訓練の効果をあげることとされる（丸山，2011a）。そして、キャンプには、動作訓練を主軸として、その動作訓練を効果的に、かつスムーズに実施するために様々なスケジュールがあり（糸永，2008）、そのスケジュールを支える主要素として、丸山（2011a）は、集団療法、生活指導、親の会、Terの研修、研究を挙げている。これらと動作訓練を含めた6本柱（丸山，2011b）について、針塚（1976）を参考に、表2に示す。

* 指導教員 丸山 千秋

表1. 第29回心理リハビリテーション東京キャンプキャンプの日程と内容 (丸山, 2011a)

平成22年(2010年)							
	8月22日(日)	8月23日(月)	8月24日(火)	8月25日(水)	8月26日(木)	8月27日(金)	8月28日(土)
7:00		起床	起床	起床	起床	起床	起床
7:30		朝の会	朝の会	朝の会	朝の会	朝の会	朝の会
8:00		朝食	朝食	朝食	朝食	朝食	朝食
9:10		9:00 研修実技Ⅲ	9:10 動作訓練	動作訓練	動作訓練	動作訓練	動作訓練
10:10		10:30 会場設置	10:10 研修 親の会	研修 親の会	研修 親の会	研修 親の会	親指導 効果測定
11:40		11:00 研修実技Ⅳ	11:40 動作訓練 親の会	動作訓練 親の会	動作訓練 親の会	動作訓練 親の会	写真撮影
12:40		12:30 昼食	12:40 昼食	昼食	昼食	昼食	13:00 閉会式
13:00		13:00 開会式 13:20 インテーク 訓練前測定 写真撮影	13:30 昼寝	昼寝	昼寝	昼寝	
14:30			14:30 おやつ 集団療法	おやつ 集団療法	おやつ 集団療法	おやつ 集団療法	
15:00		15:00 研修講義	16:10 動作訓練	動作訓練	動作訓練	動作訓練	
16:10		16:30 研修実技Ⅰ	17:10 夕食	夕食	夕食	夕食	
17:10		17:30 夕食 入浴	入浴・自由時間 SVミーティング チームミーティング	入浴・自由時間 SVミーティング チームミーティング	入浴・自由時間 SVミーティング チームミーティング	入浴・自由時間 SVミーティング チームミーティング	
18:10		19:30 研修実技Ⅱ	19:00 キャンプのつど い	19:00 班別ミーティング	19:00 班別ミーティング	19:00 班別ミーティング	
20:00		20:30 全体ミーティング	20:30 全体ミーティング	20:30 全体ミーティング	20:30 全体ミーティング	20:30 全体ミーティング	
21:00		21:30 全体ミーティング	21:30 全体ミーティング	21:30 全体ミーティング	21:30 全体ミーティング	21:30 全体ミーティング	
22:00		就寝	就寝	就寝	就寝	就寝	

表2. 心理リハビリテーションキャンプにおける6本の柱とそれらのねらい

柱	ねらい
動作訓練	トレーナーが、トレーニーの適切な緊張を強化し、不当で慢性的な緊張を除去することにより、トレーニーが身体を動かす動作感覚を敏感に把握し、自ら誤った動作パターンを認知して、新しい動作パターンを確認し、習得する。
集団療法	トレーニーが、他のトレーニーやトレーナー、母親などと楽しく交流する機会を通して、他者への関心を増し、また、自らの活動性や積極性を増加させることで、動作への意欲を高める。
生活指導	トレーニーの生活を是正し、生活に対する心構えや態度を自主的で積極的なものに変えようとする。
親の会	母親の動作訓練そのものを受け入れ、母親への訓練法の指導、トレーニーとの人間関係の理解等を、SVや他の母親との話し合いや交流により取り扱う。
トレーナーの研修	トレーナーの訓練上の迷いや困難、トレーナー対トレーニーの訓練関係上の感情的葛藤、トレーナーの訓練意欲・態度等を個々のケースによりスーパーバイズする。
研究	臨床的な経験だけでなく、動作の研究を行う。

以上のように、キャンプには、動作訓練に資することを目的としながらも、様々なスケジュールと要素が組み込まれ、Teeだけではなく総てのメンバーがそれらに関与する仕組みとなっている。例えば、表2にあるような親の会やTerの研修の中にあるスーパーヴィジョンの枠組み(武内, 2011)、または、生活指導もTeeの生活だけではなく生活面でのお互いの助け合いを促す側面も備える(丸山, 1984)。

メンバーそれぞれが課題を抱える

既述のような仕組みがあることと、キャンプが、Teeだけでなく、Terや母親の側も変化、成長していく場であり（丸山，1984），キャンプ成員すべての個々人のこころの活性化が目的とされること（清水，1987）から推察するに、キャンプのメンバー全員に成長のためのチャンスが与えられていると考えられる。それは、裏を返せば、メンバー全員に成長をするために必要な課題が与えられるということであり、それは、武内（2010）が述べるように、キャンプのプログラムが濃密で過酷であることから窺える。その課題とは、Teeであれば、集団の中での自己表現であり（丸山，2011a），TerであればTeeとの訓練関係がうまく進まないことであり（鶴，1987），SVであれば、個々のTerによって柔軟にスーパーヴィジョン変えることであり（武内，2011），親であれば子どもの心の理解の仕方（鶴，1987）であるのかもしれない。そしてキャンプには、そのような各自が課題を抱えながら過酷な一週間を過ごし成長するための仕掛けのようなものがあると考えられる。

キャンプの“流れ”と一体感

その仕掛けは、キャンプの“流れ”と表現される。ここでの“流れ”とは、集団が作り出す同じ目的のためにまとまって進んでいこうとする雰囲気のようなものであると考えられる。鶴（1987）は、目的・目標を持った集団が繰り返される1週間は、自ずと一つの流れを呈するとし、武内（2010）は、メンバーがその流れに乗ることで凝集性が高まり一体感が生まれるとしている。つまり、メンバーがその流れに一体となって乗っていくことが、各自の抱える問題に向き合う、あるいは、克服して成長する上で重要なのだと考えられる。そして、丸山（2011a）は、その流れを作る要素の1つとして集団療法を挙げ、集団療法を司る集団療法係の重要性を述べている。

集団療法係の役割

表1にあるように、毎日のプログラムには、集団療法が組み込まれ、その司会進行の他、毎回の食事やおやつのおやつ司会進行も集団療法係が担当する。そして、食事への移動や集合が済むまでの間も集団療法係が中心となってアコーディオンの演奏と全体の手拍子でその間を繋ぐ。このような集団療法でのプログラムを主軸とした作業を通して、集団療法係には、流れを作りその流れを保持していくこと求められる（丸山，2011a）。

キャンプの流れを作る工夫と流れを知るバロメーターとしての手拍子・声

丸山 (2011a) は、主に集団療法の企画からそれらの流れを意図的に作り、後押しする工夫について述べている。それらの工夫と、鶴 (1987) の示したキャンプの流れの区分をまとめて示したものが表3である。

表3. キャンプの流れとその流れを後押しする集団療法の工夫

期	流れ	集団療法の工夫
トレーナー研修	仲間の存在をお互いに知り合い、訓練への気構えが高まる時期。 課題: 個人的な動揺	朝の会のデモンストレーション等を通して見通しの提示やそれらへのこころの準備。
初期	訓練が始動し、集団の一体感が高まっていき、全体の雰囲気としてまとまりが出てくる時期。 課題: 信頼関係の構築	メンバー同士が一体感を得ることや、キャンプをこのメンバーと共に乗り越えていくという気構えを作る。
中期	全体に落ち着きができて、じっくりと訓練や研修、親の会に取り組む時期。 課題: 訓練の行き詰まり、閉鎖感	トレーニーや参加者の心を解放する。トレーニーが、ひとりの人間として参加者全員から声援を受けながら、自分を遠慮なく出す。
後期	キャンプの終結と別れに向けてのまとめの時期。 課題: 訓練の成就と焦り	盛り上がったキャンプをどのように収拾させ、現実の世界に戻っていくか、参加者がどのようにお別れをするかを考慮。

ただし、これらの流れについて鶴 (1987) は、計画通りには流れず、その都度の対処、修正、てこ入れを行う必要があるとしている。また、流れの修正をする上で重要なものとして、丸山 (2011) は、食事の際に唄を歌いながら一緒に行う手拍子の音の大きさや声の大きさを挙げ、それらがキャンプの雰囲気が盛り上がってきたか否かのバロメーターになるとしている。また、武内 (2010) は、キャンプを一つの事例として捉えた研究から、ある日の夕食時の拍手の音の高まりとキャンプ全体の一体感について、その日の集団療法での出来事との関連から考察している。

本研究における問題

既述のように、キャンプの流れについては、実際のキャンプを基に記述的に論じられているものが多い。また、臨床動作法においては、キャンプにおける動作訓練以外の要素を論じるものは少なく (武内, 2011)、その視点は、Ter 個々の技法 (古賀, 1995) やTeeの動作そのもの (遠矢, 1991)、あるいは、TerとTeeの関係性 (田中, 1991) に向けられることが多い。つまり、TeeとTerの個別的な関係に終始した研究が多く、キャンプを全体として捉え、その意義や効果について検討したものが少ない傾向にある。さらに、それらについて数量的に検討したものはほとんど見当

たらない。

よって、本研究では、臨床動作法の一形態であるキャンプについて、以上の事柄を問題と考え、キャンプを全体として捉えた時に、その効果を後押しすると推測される流れやその変化について、数量的に捉えることを試みる。

目的

キャンプの流れを、食事時の手拍子を手掛かりに、具体的な数値を根拠として捉える。

方法

研究協力者：大学生大学院生男女43人。予備調査協力者8名（男性1名、女性7名）、平均年齢22.00歳（SD=4.00）。本調査協力者35名（男性16名、女性19名）、平均年齢22.06歳（SD=7.39）。

刺激：第30回心理リハビリテーション東京キャンプ（以下、第30回キャンプと記す）における、食事前1分間の手拍子映像12場面。内訳は、2日目朝食時、3日目朝食時・昼食事・夜食事、4日目朝食時・昼食事・夜食事、5日目朝食時・昼食事・夜食事、6日目朝食時・昼食事、である（ここでの2日目とは、表1における8月24日に相当する）。なお、映像は、定点からのものであり、キャンプ参加者の食事風景全体が映り込むように配慮され、また、キャンプ参加者のプライバシー保護のためにぼかし加工が施された。

手拍子映像の概要としては、食堂にキャンプ参加者が全員集合するまでの間、順次集まった参加者が手拍子をしながらその時間を過ごしているものであり、集団療法系の司会者が集団を誘導し、アコーディオン担当者がアコーディオンで「メリーさんの羊」や「きらきら星」といった4拍子の童謡を弾いている場面である。

手拍子に関しては、司会者からの言葉による指示で促されるものではなく、参加者の自由な判断によりなされるものである。ただし、“食事の際、手拍子をしながらいただきますを待つ”という枠組みは初参加者を除くキャンプ参加者に浸透したものであり、また、言葉では指示されないまでも、司会者から雰囲気として促されることは十分にあり得る。

表4. 形容語対質問紙項目

	非常に	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	非常に	
積極的な								消極的な
不安定な								安定した
大きい								小さい
感じのよい								感じのわるい
バラバラな								まとまった
元気な								疲れた
よわよわしい								たくましい
はっきりした								ぼんやりした
活発な								不活発な
苦しい								楽しい
合っている								合っていない
落ち着いた								落ち着きのない
さびしい								にぎやかな
優しい								厳しい
無気力な								意欲的な

質問紙：井上ら(1985)を参考に、また、予備調査から15形容詞対を選定し、7段階評価を行うSD法による質問項目を作成した(表4)。予備調査においては、12場面の視聴から、予備調査協力者8名が自由記述形式で書き出した内容から、特に記述の多かった形容詞を選抜した。なお、15形容詞対は、左右のそれぞれの側での印象の価値判断に偏りがでないように、適宜左右を入れ替えて配置をした。例としては、「感じのよいー感じのわるい」を配した後に、「バラバラなーまとまった」という様に、左側、あるいは、右側だけにポジティブ、あるいは、ネガティブであると思われる印象の形容詞が並ばないように配置された。

手続き：本調査協力者は、5人程度のグループで同時に12場面刺激を視聴し、各自が質問紙にて各場面の印象を評定した(図1)。なお、本調査協力者には、各場面を視聴した後1分間で質問紙に回答を記入することが求められた。また、12場面の提示順は、場面呈示の順番の影響を取り除くために、グループ毎でランダムになるように変更された。

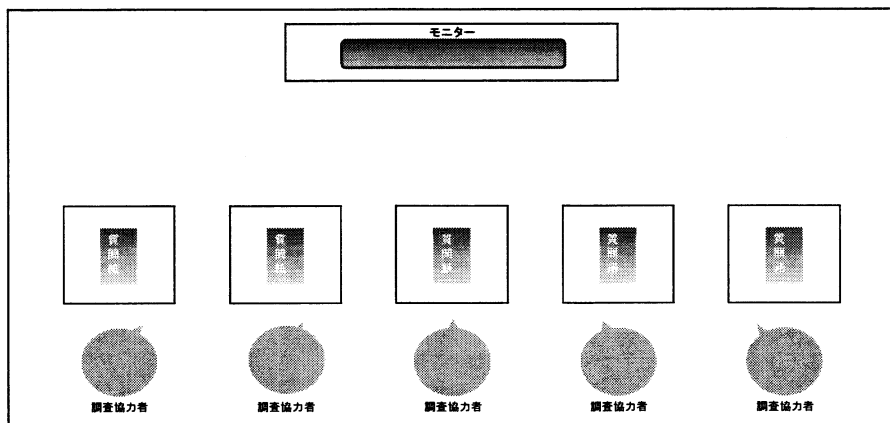


図1. 調査場面

結果

因子分析結果：15形容詞対の回答に関し、ネガティブであると思われる印象の側の端の得点を1点、ポジティブであると思われる印象の側を7点として得点化し、主因子法(プロマックス回転)による因子分析を行い、スクリープロットの基準により3因子を抽出した。表5に因子負荷量行列と因子間相関を示す。

第Ⅰ因子は、「よわよわしいーたくましい」や「不活発なー活発な」、「無気力なー意欲的」などの項目で因子負荷量が高く、集団の活発さや明瞭感、大きさ等を表す因子であると解釈できるため、「活性度」因子と命名した。第Ⅱ因子は、「感じのわるいー感じのよい」や「苦しいー楽しい」、「厳しいー優しい」といった好き嫌いの感じについての因子であると解釈し、「好感度」因子と命名した。そして、第Ⅲ因子は、「バラバラなーまとまった」や「合っていないー合っている」、「不安定なー

安定した」と、まとまりや合わさり等に関する因子であると解釈し、「凝集度」因子と命名した。また、クロンバックの α 係数は.72～.83の範囲にあり、高い内的整合性を示している。

なお、「落ち着きのない—落ち着きのある」の項目は、第Ⅰ因子と第Ⅱ因子にまたがり、因子負荷量が.40以上であったため、項目を削除し、因子分析を行っている。

表5. 15形容語対の因子分析結果

変数(質問項目)		第Ⅰ因子 活性度	第Ⅱ因子 好感度	第Ⅲ因子 凝集度
第Ⅰ因子 活性度 ($\alpha=.828$)				
・よわよわしい—たくましい		.89	-.16	.05
・不活発な—活発な		.82	.11	-.05
・消極的な—積極的な		.77	.15	-.06
・無気力な—意欲的な		.76	.10	.00
・疲れた—元気な		.73	.20	-.04
・さびしい—にぎやかな		.65	.19	-.13
・ぼんやりした—はつきりした		.61	-.12	.32
・小さい—大きい		.56	-.35	.08
第Ⅱ因子 好感度 ($\alpha=.772$)				
・感じのわるい—感じのよい		-.14	.94	.15
・苦しい—楽しい		.30	.62	-.03
・厳しい—優しい		-.10	.54	.04
第Ⅲ因子 凝集度 ($\alpha=.806$)				
・バラバラな—まとまった		.01	-.05	.79
・合っていない—合っている		.12	.04	.77
・不安定な—安定した		-.11	.26	.64
因子間相関				
	活性度	1.00		
	好感度	.69	1.00	
	凝集度	.21	.37	1.00

分散分析結果：3因子の因子得点を従属変数として、3因子（活性度・好感度・凝集度）×12映像場面の2要因分散分析を行った。要因はいずれも被験者内要因である。その結果、3因子の主効果は認められず（ $F(2,68)=.00, n.s.$ ）、12映像場面の主効果（ $F(11,374)=6.02, p<.01$ ）並びに、交互作用（ $F(22,748)=16.18, p<.01$ ）が認められた。また、交互作用が有意であったので、Bonferroni法にて下位検定として、単純主効果の検定を実施した。結果の概要を表6と図2に示す。なお、図2においては、結果とキャンプの日取りや朝・昼・夜・の食事との関連を示すために、それらを記載した。

表6. 因子毎の各映像場面因子得点平均

映像場面	活性度因子		好感度因子		凝集度因子	
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)
場面1	-.40	.85	-.15	1.00	.12	.77
場面2	-.51	.77	-.19	.82	.17	.89
場面3	-.03	.76	.04	.86	.53	.90
場面4	-.13	.87	-.24	.94	.11	.96
場面5	-.63	.76	-.30	.93	.21	.71
場面6	-.03	.93	.09	1.00	.44	.76
場面7	.99	.74	.48	.92	-.23	.98
場面8	-.68	.77	-.29	.82	-.19	.78
場面9	.74	.70	.43	.98	-.17	1.00
場面10	.47	.80	.30	.93	-.17	.83
場面11	.47	.98	.06	.92	-.32	1.04
場面12	-.27	.91	-.24	.95	-.50	.75

n=35

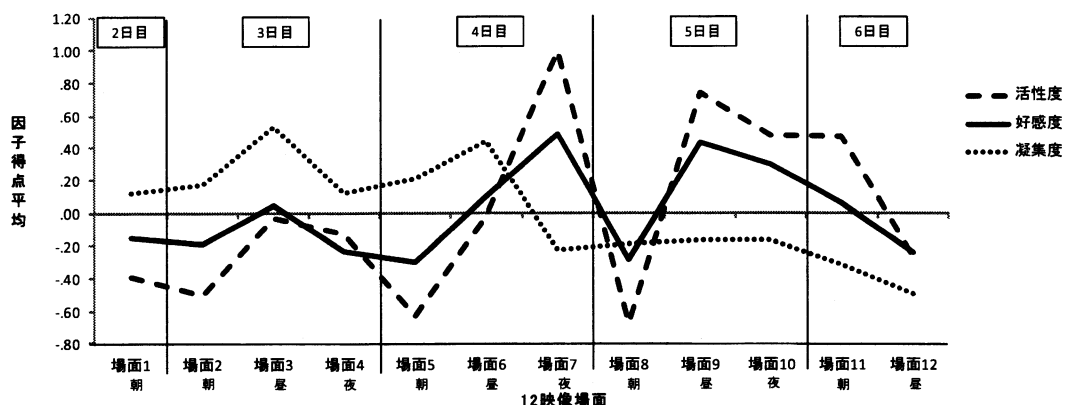


図2. 場面の推移と各因子の因子得点の変遷

単純主効果の検定結果について述べる。

まず、各映像場面における因子間の関係を見ると、場面2・5・7・9・11において、3因子のそれぞれの間で因子得点平均に有意な差が認められた ($p<.05$)。また、場面3と場面10では、凝集度因子と活性度因子、そして、凝集度因子と好感度因子の間に有意な差が認められ ($p<.05$)、場面8では、活性度因子と好感度因子、そして、活性度因子と凝集度因子の間に有意な差が認められた ($p<.05$)。因子の1ペア間のみで有意な差のあった場面は、場面1 ($p<.05$)と場面6 ($p<.05$)であり、いずれも活性度因子と凝集度因子の間で有意な差がみとめられた。

次に、各因子における場面間の関係を見ると、まず、活性度因子では、グラフから見て取れる大きな差として、場面7において、場面9を除く他の総ての場面の因子得点平均との間で有意な差が認められた ($p<.05$)。その他、キャンプの日取りを辿るように見ると、場面1と場面2に関しては、場面7・9・10・11との間で有意な差が認められ ($p<.05$)、場面3と場面4に関しては、場面5・7・9との間で有意な差がみとめられた ($p<.05$)。場面5に関しては、それ以前の場面としては場面3・

4と、そして、それ以後の場面としては場面7・9・10・11と有意な差がみとめられた ($p<.05$)。場面8では、場面7・9・10・11と有意な差がみとめられ ($p<.05$)、場面9は、場面1～6・場面8・場面12との間で有意な差がみとめられている ($p<.05$)。場面10・11に関しては、場面5・7・8・12と有意な差が示されており ($p<.05$)、場面12に関しては、場面7・9・10・11と有意な差が認められた ($p<.05$)。

好感度因子においては、同じく、キャンプの日取りを辿る形で見ると、場面2で場面9と、場面4で場面7・10とそれぞれ有意な差のある傾向が示された ($p<.10$)。場面5では、場面7・9との間で有意な差が示された ($p<.05$)。場面7においては、場面5と有意な差が ($p<.05$)、そして、場面4・12と有意な差のある傾向が示された ($p<.10$)。場面8以降では、場面8で場面10と、そして、場面9で場面12と有意差傾向が認められた ($p<.10$)。

最後に、凝集度因子については、場面2で場面12と有意傾向があり ($p<.10$)、場面3では場面8・12と有意差が ($p<.05$)、また、場面11と有意傾向 ($p<.10$) が認められた。場面5・6では、場面12と有意差が認められ ($p<.05$)、場面6では場面8と有意傾向が認められた。

考察

考察においては、因子間の関係や各因子の起伏における数量的な差を根拠としながら、第30回キャンプ全体の流れについて、その流れを時系列的に追いながら、先行研究で示された記述的・経験的な流れやその流れを作り出す工夫と照らし合わせながら述べる。

キャンプ初期：場面5までの変化

図2を参考に、場面5までの各因子の変化を概観すると、凝集度が活性度と好感度を上回り、また、場面5においては活性度がそれ以前に比べて低下していることがわかる。結果より、前者に関しては、場面4以外は、常に凝集度が活性度を大きく上回っており、場面2、場面3そして場面5においては、好感度と比しても凝集度が上回っていることが示されている。また、後者に関して、活性度では、場面3・4よりも場面5で因子得点が低下していることが示された。

以上のことから、この時期に関しては、キャンプメンバーの一体感やまとまりに比して、集団として活性する感じや肯定的な感情が低く、全体がまとまる感じに乗せられながらもまだ個々のメンバーが自分自身を解放できない状態にあるのではないかと考えられる。この状態を、表3と照らし合わせて考えると、まさに、鶴 (1987) の述べる、「集団の一体感が高まっていき、全体の雰囲気としてまとまりが出てくる時期」であるキャンプ初期の様相と対応する。また、そこには、丸山 (2011a) の述べるキャンプ初期の集団療法の工夫としての「メンバー同士の一体感やキャンプを共に乗り越えるという気構えを作る」という意図が反映されているものと考えられる。

一方で、既述の通り、この時期においては、参加者がころを解放する状態までには至っていな

いと考えられる。しかし、それは、参加者の心の解放（丸山，2011a）が意図されるキャンプ中期を迎える上で重要な点であるといえる。その理由は、場面5において、活性度のみが低下していることから、鶴（1987）の述べる、「全体に落ち着きができる」時期である中期への移行段階と見ることができると同時に、「訓練の行き詰まりや閉鎖感」が生じている可能性が示唆されるからである。つまり、この時期は、キャンプ全体として、まとまりが出てきつつも、参加者の気持ちとしてはやや停滞し、何らかの大きな変化や転換が待たれる時期と推測される。

キャンプ中期：場面5から場面8までの変化

場面5から場面8の間は、因子間で見ても、因子毎で見ても大きな変化の生じた時期であるといえる。因子間で見ると、場面5においては、因子得点の高い方から、凝集度、好感度、活性度の順であったにも関わらず、場面7では、凝集度と活性度が逆転し、活性度、好感度、凝集度の順となっており、場面8では、更に一転し、活性度が他の2因子より因子得点が低いという結果となっている。また、因子毎で見ると、活性度では、場面5と場面8よりも場面7が有意に高い因子得点を示しており、好感度では、場面5よりも場面7の方が因子得点が有意に高い結果となった。また、凝集度については、場面6よりも場面8の方が因子得点が有意に低い傾向を示した。

以上のことから、この時期に関しては、キャンプメンバーの集団として活性する感じや肯定的な感情が一気に大きく上昇してすぐに低下し、また、全体がまとまる感じに関しては低下した時期と考えられる。この状態に関しては、キャンプ全体に落ち着きが出つつも参加者の気持ちとしてはやや停滞した状態から、各参加者が一気に心を解放し、その停滞を打ち破る状態へと一気に移行した時期であると解釈され、それは、鶴（1987）や丸山（2011a）の述べた表3のキャンプ中期の流れやそれを支える集団療法の工夫と合致すると考えられる。ただし、活性度や好感度が上昇した一方で凝集度が低下したこと、そして、場面7で上昇した活性度が場面8では一転して一気に低下したことについては別途考察が必要である。

まず、凝集度の低下については、全体としてのまとまりを犠牲にして、しかし個々が強固に自分らしさを発揮し始めたことで、集団全体が活性し、また雰囲気として好感の持てるものとなったのではないかと推測される。事実、場面7においては、手拍子の質が変化している。それまでは、4拍子のアコーディオンで弾かれた曲に合わせて1拍目から2拍子に1度ずつ＜パン・パン＞と打たれていた手拍子が、1拍目からまず2拍子に1度＜パン＞、そして、3拍目から4拍目で＜パ・パン＞という様に变化した。この変化は、予備調査の時点で何人かの協力者から、「手拍子が変わった」等と指摘されていた。また、この変化が起きる段階として、場面7では、突然変化が起きたわけではなく、徐々に参加者がその変化を受け入れ合わせていくという場面が観察されており、その意味では、バラバラな印象を与えることは容易に想像がつく。つまり、既述の推測に合わせるならば、手拍子の変化という大きな変化に対して、個々が活性され肯定的に参加するようになる一方で、その変化への戸惑い等からそれまでの手拍子と新しい手拍子が混在したことで凝集性が低下した、言い換えれば、凝集性が犠牲にされたのではないかと推測される。そして、それらの急激な変化への戸惑いや新た

な手拍子を続けるか否かに対する迷いから、場面8での活性度の低下が生じたとも考えられる。ただし、これらの推測は、手拍子の変化についての数量的な根拠がなく、また、場面8での活性度の低下は、食事時間の要因が加わることが予想されるため（6日目の朝食以外、各朝食で活性度が他の因子よりも有意に低い）、論拠に乏しいものであると言わざるを得ない。

キャンプ後期：場面8から場面12までの変化

場面8から場面12の間は、因子間で見ても、因子毎で見ても大きな変化のない落ち着いた時期であり、各因子共場面12に向けて徐々に低下する傾向にあるといえる。これらのことは、因子間では、場面9・10・11で認められた差が場面12においては認められなくなっていること、そして、因子毎では、活性度と好感度において場面9よりも場面12で因子得点が有意に低下していることから裏付けられる。

以上のことから、この時期は、それ以前の盛り上がりを含む大きな変化を経て、キャンプ全体が収束に向けて動き始め、実際に収束していった時期であると考えられる。そして、これ等のこともまた、鶴（1987）の述べるキャンプ後期の流れとしての「キャンプの終結と別れに向けてのまとめの時期」と合致すると考えられる。また、その流れを支える集団療法の工夫として、丸山（2011a）の考える「盛り上がったキャンプをどのように收拾させるかの考慮」という意図とも合致するものであると推測される。

なお、場面8にて大きく低下した活性度に関しては、場面9にて再び有意に上昇している。手拍子の変化と関連付けて述べるならば、場面9以降も手拍子は変化したままではなく、元々の手拍子も混在しながら変化後の手拍子も観察された。ただし、この点に関しても、根拠に乏しいことから、本論では考察を控える。

まとめと今後の展望

本研究から、キャンプの流れが、食事時の手拍子を手掛かりに、具体的な数値を根拠として捉えられ、また、それらにより、経験的・記述的に述べられてきた先行研究の一端を客観的な数値として裏付けることができたと考える。

ただし、本研究においては、キャンプの流れの一端は捉えられたが、その流れの変化に影響を与えた要因までは捉えられなかった。それは、例えば、手拍子の変化やその影響、そして、その変化がどのようにもたらされたのか、あるいは、集団療法のプログラムのうち、具体的にどのプログラムがどのように流れに影響したのか等である。また、Teeの訓練効果を高めるというキャンプの大きな目標に、今回実証された流れがどのような影響を与えるのかについても検討が必要である。

これらについて、今後、客観的な数値を根拠として研究を続けていくことで、臨床動作法、ひいては、心理臨床における心理リハビリテーションキャンプの客観的な効果や有用性が示されていくことを願う。

《付記》

本研究を執筆するに当たり、貴重な映像場面を提供して下さった第30回東京キャンプ参加者の皆様と調査に協力して下さった協力者の方々にこころより感謝申し上げます。また、ご多忙の中、執筆に際して熱心にご指導をして下さった丸山千秋先生、質問紙作成や分析の仕方について多くの有用な助言をして下さった池上真平氏、そして、忌憚ないご意見を下さったゼミの皆様、陰で支えてくれた家族にこころより御礼申し上げます。

引用文献

- 針塚進 1976 集団集中訓練キャンプの企画 日本特殊教育学会第14回大会発表論文集 身体・運動, 29, 72-73.
- 井上正明 小林利宣 1985 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究, 33, 253-260.
- 糸永和文 2008 障害児に対する心理リハビリテーション 大阪教育大学紀要 第IV部門, 57 (1), 27-36.
- 古賀精治 1995 臨床動作法における訓練者の力量の評定尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 特殊教育学研究, 33 (3), 13-21.
- 丸山千秋 1984 心理リハビリテーションキャンプにおける脳性マヒ児の動作変容 青山学院大学文学部紀要, 26, 1-64.
- 丸山千秋 2011a 心理リハビリテーションキャンプの運営についての検討－心理リハビリテーションキャンプにおける集団療法－ 青山学院大学教育人間科学部紀要, 2, 133-144.
- 丸山千秋 2011b 心理リハビリテーションから学んだもの 青山学院大学心理臨床研究, 11, 81-89.
- 清水良三 1987 集団療法 成瀬悟策編 障害児臨床シンポジウムⅡ「心理リハビリテーションキャンプ」九州大学教育学部附属障害児臨床センター, 45-52.
- 武内智弥 2010 動作法を用いた宿泊集団集中訓練（キャンプ）全体をひとつの事例として捉えた事例 検討－第2X回心理リハビリテーション東京キャンプを振り返って－ 青山学院大学教育人間科学部紀要, 1, 269-286.
- 武内智弥 2011 心理リハビリテーションキャンプにおけるスーパーヴィジョンとミーティングをめぐって－心理臨床を学ぶ学生の視点から－ 青山学院大学教育人間科学部紀要, 2, 159-171.
- 田中信利 1991 動作訓練におけるコミュニケーション構造 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）, 36 (1), 87-94.
- 遠矢浩一 1991 筋運動学習に影響を及ぼす心的制御方略 心理学研究, 62 (5), 328-332.
- 鶴光代 1987 キャンプの流れ 成瀬悟策編 障害児臨床シンポジウムⅡ「心理リハビリテーションキャンプ」九州大学教育学部附属障害児臨床センター, 29-33.